

中央図書館再開発のいくつかの記録

岩波峰子（信州大学附属図書館）

はじめに：花と新緑の図書館

平成27年(2015)5月、信州大学附属図書館中央図書館の増築部2階で机と椅子の納品が始まった。2階は「共同学習スペース」として会話しながらグループで学習することを目的としているため、机も椅子もキャスター付きで利用者が自由に動かせるタイプである。椅子の座面は汚れることを懸念して黒としたが、背クッションは黄緑色とした。増築部利用者スペースの外壁は3面のほとんどが窓で、その向こうに木製のルーバーが立っている。床のタイルカーペットも窓際のカウンター席の天板も、暗くならない程度の落ち着いた茶色。そんな建物は、室内では椅子の背の明るい緑が映え、窓の外は鮮やかな新緑だった。

増築部の建物工事が完了した平成26年度末、園庭の木々はまだ芽吹き前で幹や枝だけだった。それから什器の搬入や館内サインの取り付けの間に春を迎え、敷地の一番南側でなんとか残った桜が見事な花を咲かせた。リニューアルの開館は、利用者に館内から桜を見てもらうには間に合わなかったが、これから2階・3階の窓際の席から花を目前にする年が続いてほしい。

4日間の決定

平成25年1月23日の第283回役員会において、平成24年度学内予算の2次補正案が承認された。当該補正予算は、「耐震改修工事関連事業(附属長野中学校の施設機能強化・退避教室確保)」及び「耐震改修工事関連事業(教育学部校舎改修に伴う移転・建物新営設備整備)」の各学内プロジェクトに配分することになり、同日開催の拡大役員会に報告するとともに、2月1日(金)開催の経営協議会に付議することになった。

ところが、平成25年1月29日付けで、(文部科学省)大臣官房文教施設企画部計画課から「平成25年度国立大学法人等施設整備実施予定事業」が公表され、その中に「信州大学 松本団地 図書館改修」の一行があった。当然、信大の環境施設部や経営層は1月29日以前に情報を得ていたと思われるが、前述のとおり1月23日の役員会で、教育学部の耐震改修関連に平成24年度学内予算の2次補正を振り向けると決まったのだから、その時点では誰も知らなかったのだろう。学内情報の過疎地・附属図書館の事務部が知ったのは1月29日の直前であった。

2月1日14時15分からの臨時役員会で、急遽、平成24年度学内予算の2次補正に「中央図書館再開発事業 4億5,000万円のうち2億8,000万円(残りは平成25年度以降に措置)」が追加提案され、承認

された。その後、同日の経営協議会に付議され、承認されたという報告が次の臨時役員会(同日16時50分開会)であった。経営協議会にかけられる議題を先に審議承認するために、この日は2回臨時役員会を開いたわけである。

もちろん、以前からの「信州大学附属図書館将来構想案2011」の策定や、平成24年度に複数回、大学経営層への説明を行ったという素地があつてのことだが、この時の経営層の決断の速さは信じられないほどであった。

附属図書館事務部からは、2月1日17:00に各館の館長・副館長宛に「中央図書館の耐震改修についてH25年度施設概算要求が通りそうだと内々示がありました。」と、ようやくお知らせをしている。現場は全く追いついていない状況だった。

予算規模が決まっていないのに設計が走る

いつまでも茫然自失しているわけにはいかないので、まず、副館長席前の応接セットを撤去して、長机とパイプ椅子で打合せ場所を作った。そして、職員で当面の作業の分担を行った。分担として最初に作ったチームは以下のようなものだったが、実際には「みんなで何でも」やっていった。

- ・スケジュール(これから必要なことを考え、日程の調整をする)
- ・ゾーニング(全体設計に出す図書館の要望をまとめる)
- ・引越し(移転の仕様書案と実作業の段取りを考える)
- ・仮設(工事中の開館や仮事務室を考える)

2月1日の臨時役員会で承認された平成24年度業務達成基準適用プロジェクト「中央図書館再開発事業 4億5,000万円」の内訳は、

設計	5,000万円
工事費(改修)	5,000万円(文部科学省からの施設整備費補助金に足す)
工事費(増築)	3億円
移転費	2,000万円
備品	3,000万円

であった。

一般的にコンクリート造の公共的な建物では、工事費は1㎡あたり50万円と言われている。3億円では600㎡の建物しか建たない。奥行きを10m以上、たとえば12mとすると旧南棟の幅に合わせた平屋か、幅の3分の1だけになってしまう。経営層への説明用に幅3分の1、幅3分の2のレイアウト案も作りながらも、1,800㎡まで拡大してほしいと笹本館長を中心に要望を繰り返した。

ゾーニングチームでは、3月から環境整備課(のちに設計業者も含む)との打合せを重ねたが、附属図書館から要望していた「南棟の幅いっぱい合わせた増築」が可能となる追加予算が承認されたのは、平

成25年11月20日の役員会および11月25日の経営協議会であった。もちろん、その頃には改修工事は始まっており、旧南棟のベランダを盛大に壊していた。

学部図書館には申し訳ない

「信州附属図書館将来構想2011」の最大のポイントは、「学部図書館の資料の一部を中央図書館に集中させ、学部図書館に学習スペースを生み出す」ことだった。しかし、中央図書館の増築が学習スペース中心となって資料保存スペースが増えないため、学部図書館にとっては何の良いこともない増築になった。それどころか、快適な中央図書館に慣れた新2年生が各学部に来た時、図書館の施設・設備に落胆することも容易に想像できる。中央図書館の次期増築(L字棟)も進め続けなければならないが、それ以上にこれから学部図書館の整備をどう実現させるかは、附属図書館にとって重大な課題である。

日本で一番普通の図書館を目指す & 閲覧席各種それぞれの居場所

建物の設計段階でも内装や什器の選定でも、目立つ形や色は選択しなかった。壁も床のタイルカーペットもごく地味で、階ごとにタイルカーペットの色は変えたが、それも茶・ベージュ・こげ茶程度。閲覧机も、以前からの再利用を別にすれば、あたりまえの四角いテーブルばかりになった。ただ、増築部は机も椅子もキャスター付きで利用者が自由に配置できる。また、窓際のカウンター席は一人分の幅を150cmとし、事務机並みの広さを確保した。

施設・設備では奇をてらわず平凡で使いやすい図書館を目指した。途中で、あらためて「この図書館のコンセプトは何でしょう？」という疑問が出たことがあったが、「日本で一番普通の図書館」がコンセプトだったと思う。

「普通の」図書館は、一人でもグループでも、パソコンを使う時も使わない時も、資料を山積みにして調べたい時も1冊の本にじっくり取り組みたい時も、どんな目的や気分で訪れても、その時・その人に合った席がある、そんな場所である。

地域連携・産学協同、もしくは縁故の力

当初の予算が、移転費：2,000万円、備品：3,000万円であったため、いかに安く上げるか、は常に付いて回る問題だった。文部科学省からの施設整備費補助金による改修工事には、翌年度に移転費と建物新営等設備を要求できるが、それぞれ900万円程度でまだまだ貧乏な状況だった。実際には平成25年11月に増額(実施計画変更届)が承認されて、移転費：5,000万円、備品：4,800万円としていただき、お金の心配をしなくてもよい、大変恵まれた改修・増築工事となった。

それでも無駄遣いはできないので、費用を抑える方法はその時その時に検討した。一番は資料の保管

料を節約するために、什器は安曇野市教育委員会に無料で、信濃毎日新聞にも破格の低額で場所を貸していただいた。旧制松本高校以来の絵画などの美術品は、長野県信濃美術館に展示・研究の名目で借りていただき、工事が終わるまでそのまま預かっていただいた。これらの交渉には、笹本館長をはじめ、それぞれの人的ネットワークを最大限に活用して依頼をした。

地域連携では、リニューアルを契機に図書館連携協定を結んでいる自治体・個人の方・農学部から記念品をいただいた。漆器・彫金・絹織物など地元の特産品が多い。「図書館だから」と温湿度計を贈ってくださった自治体もあった。大学の建物は、必要な物はあるが、どうも無機質で事務的なものだが、そこにプラスアルファの潤いを与えていただいた。

謝辞

再開発が始まった時点では具体的な準備は何もできていなかった。設計のためのワーキング・グループを平成25年度になってから組織して、工学部の教員に入っていただき、学生の力もずいぶん貸してもらった。中央図書館の外観と、新南棟3階が見通しのよい開架スペースになったのは、ひとえに寺内研究室の皆様のおかげである。

環境整備課を中心とする環境施設部の方々には、親切に質問や要望に対応していただいた。一例をあげると、新南棟はほとんどの壁面に仕上げの下に鉄板が入っていて、マグネット対応になっている。森副館長の発案によるもので、改修工事後、こうでないと仕事にならない、と思うほど便利に使っている。しかし、増築部は予算不足で一旦は無理となったが、環境施設部でどうにかやりくりをして、新南棟のほとんどをマグネット対応壁としていただいた。

図書館が環境施設部にいろいろと要望を出すと、最終的には設計と施行の担当業者に大きなこと・細かいことの両方で無理をきいてもらう、ということになった。特に電気担当の業者には複雑で難しい運用に対応してもらい、職員が気付かない点まで考えて提案していただいた。

また、財務部には、予算面・調達面の双方で大変ご負担をかけた。現場が仕事を進めやすいようにフォローしてくださった担当者や上司の方々に深く感謝する。

注：文中の肩書きは、平成26年度のものである。